

サルトルの実存主義による

ヒューマニズムの探究

寺 本 彦

一、プロジェクト

——場面はフランスのあるレストランであろう——

「僕は」と独学者が言う。「人間を愛することよりも憎むことの方が不可能だと思います」

独学者は保護者めいた、疎ましい様子で私を眺める。彼はまるで自分の言うことに頓着しないかのように呟く。

「彼等を愛さなければなりません。愛さなければ……」

「誰を愛さなければならぬのですか。ここに居る人々をですか」

「そうです。ここに居る人たちも、皆を」

独学者は青春に輝くばかりの二人連れの方をふりむく。それが愛さなければならぬものだ。独学者は白髪の紳士をちらつと眺める。

それから私の上に視線を移す。私は彼の面上に暗黙の質問を読む。私は頭で否定する。彼は私を憐むような顔をする。

「君もまた」と苛々して私は彼に言う。「君もやはり彼らを愛してはさなすのです」

「そうでしょうか。僕はあなたの御意見に賛成致しかねるのですが」

これはサルトルの作品「嘔吐」に表現されている、小説の主人公ロカンタンと、ある独学者との「ヒューマニズム」をめぐる対話のデスカッションの一騎である。

独学者はヒューマニストらしく、ここにいる「人たち皆を愛さなければならぬ」というのに、ロカンタンは「君もやはり彼等を愛してはいないのです」と鋭く彼のヒューマニズムを批判する。

ヒューマニズムは実存主義者サルトルにおいては、どのように理會されているのか、これを探究し教育の底に流れるものを確執しようとすることが今の私の一つの企プロジェクトであり目的である。

二、アプローチ

実存的思考を表現する言葉として、われわれは、実存哲学、実存主義という言葉を知っている。

実存哲学 (Existenz Philosophie) という語は独逸ハイデルベルク大学教授カール・ヤスパーズ (Karl Jaspers, 1883—) が用いはじめから一般に通用するようになったといわれている。

近頃は実存主義(Existente, Existentialism)という言葉が、フランスのジャン・ポール・サルトル(Jan Paul Sartre, 1905—)等によつて盛んに用いられるようになってゐる。

では実存、存という言葉は何を意味するであろうか。

実存とは現実、存在の約であるといわれている。これはラテン語の *existere* 又は *existere* から来てゐる。ex = out, sistere = to stand で結局現われる、という意味であり、この動詞から *existentia* 現実存在という名詞が作られたのであるといわれている。

だから *existentia* というラテン語の名詞は存在と訳されるにしても、特に現実に現われている存在をいふ、あらわすように思われる。

言語的、せんさくは以上にして、それでは現実存在約して実存は如何なる意味を持つかが問われねばならない。

まず現実存在というのは本質存在に対する語であると答えることから始めよう。

一体存在という語には二つの意味が考えられる。その一つは現実存在であり、他の一つは本質存在である。現実存在というのは、例えば「Aという人がある」というときの存在(ある)で、本質存在というのは「Aは人である」というときの存在(ある)である。

日本語では同じように「ある」と発音しているが、そのあり方の中味を考えてみると、そこに相違があることがわかるだろう。

即ち前者の現実存在でのあり方では、Aという人は絶対的な個別的な現実存在であつて、他の何人をもつても代ることの出来ない独自の存在である。

固有名詞としての存在である。英文法においてこれを普通名詞と區別して取扱つてゐることは周知のことである。

後に一層明かになることであるが、われわれが人格の尊厳性を問題にする場合には、かゝる意味の主體的現実、存在、が問われるべきである。

私がよく教育愛の根本的構造において、児童生徒の一人一人をその人格の底から敬愛すべきだと主張するのにもかゝる意味の存在として彼等を考えるからである。

では後者の本質存在の存在(ある)の在り方はどうであるか。「Aは人である」時の存在あるは、Aという絶対的な主語に対して人という述語を相対的に立てゝいるわけである。相対的に立てられた述語としての人は、何もAだけにかぎらずBにもCにもあてはまる共通普通の存在である。太郎も人である、し花子も人である、ことが出来るのである。

存在についてのこの二つの区別は中世の哲学者たちによつても受つがれ前者はエクシステンチア *existentia* (現実存在)、後者はエッセンチア *essentia* (本質存在)と呼ばれるのが普通になつてゐるといわれる。(「実存哲学」松浪信三郎著 六頁—一〇頁参照)

以上によつて私は本質存在との対比において現実存在—実存の概念を述べてきたのであるが、これは私が今企てゝいる現代の哲学者サルトルの実存主義を明かにするためとらなければならなかつた一つの迂り路でもあつたのである。

私は直ちにサルトルの実存主義の開明に入ることしよう。

彼の文学作品からサルトルの実存探究に近ずいた私も最初は、彼の
実存主義が日本に紹介され、問題にされた頭初のように、露骨な性的
暴露の文学でないかと感じたほどであった。

地元フランスでさえ、或る婦人が会話の途中で思わず野卑な言葉を
口にした時無礼を詫びてこう云つた「私は実存主義者になつたよう
です」と。所が「嘔吐」を読み、英訳 *Existentialism and Humanism*
「実存主義とヒューマニズム」を手にするに至つて私のサルトルへの
態度は一変した。

この時の私の状況は「嘔吐」のなかでロカントンに手記させている
それにも似たものであるかも知れない。嘔気を催し、前記の独学者と
別れた後のロカントンは、『……ベンチに私は崩折れるように腰を下
ろす。一本の樹が黒い爪で私の足下の大地を搔いている。私はどんな
にか成るに任かせ、自分を忘れて眠りたかつたであろうか。しかしそ
れはできなかつた。息がつまるようだ。

存在は眼や鼻や口やいたるところから私のなかに侵入して来る……。
そして忽ち一拳にして幕が裂け私は理解した。私は八見たV。

午後六時

私は気が軽くなつたとも満足であるとも言ふことはできない。反対
に私は圧倒されている。ただ私の目的は達せられた。知りたいと思つ
たことを知つたのである。……しかし私はもはや嘔気に襲われないだ
ろう。それは病気で一時の咳込みでもなく、この私自身なのだ……
……。たつた一人で私は、その黒い節くれだつた生地そのままの塊り
と向いつて動かなかつた。その塊りは私に恐怖を与えた。それから

私はあの啓示を得たのである。……この三、四日前には「存在するV
ということが何を意味するかを絶対に予感しなかつた。私は他の人々
と同じだつた。晴衣を着て海辺を散歩していた人々と同じだつた。私
も彼等のように「海は緑で△あるV。あの空の白い点は鷗で△あるV」
と言つていた。しかしそれが存在していること、鷗が「存在する鷗」
であることに気がつかなかつた。……存在はそこに、われわれの周
圍に、またわれわれのなかにある。それは△われわれVである。存
在について語らずには何一つ言ひ得ない。しかし結局存在に手を触れ
ることはできないのである。……』

つまりサルトルが節くれだつたマロニエの樹の根の塊から実存を開
示されたように、私は彼の作品特に「嘔吐」とか「壁」とか「実存主
義とヒューマニズム」によつて、実存主義の意味を開示されたのである。
だが私はこゝで実存主義を唯一無上のドクトリンとして礼讃の辞を
書きつらねようとしているのではない。

現にフランスでも種々の批判がなされていることはサルトル自身が
これを述べている。

例えば、カトリック派の批評家メルシエ女史は、

実存主義者は「幼児の微笑を忘れている」と非難している。

それは実存主義者が人間の本性のもつ明るい面をおろそかにして、い
たるどころ人間の醜悪なるもの、曖昧なもの、粘液的なものを指摘す
るからだ。

又、一般にキリスト教からは、サルトルの実存主義は「人間の試み
のような企の現実性や真摯さを否定するものだ」と非難される。

それは、実存主義者のように、神の誠や、永遠のなかに規定されているさまざまな価値を放棄すれば、後にはもはや厳密な意味の無価値しか残らない。ひとは自分の望むまゝに行うことができ、自己の観点から他人の観点や他人の行為を非難することができないからだとする。

更に又マルクス派は、実存主義は「人類の連帯性にそむき、人間を孤立したものと考える」と批判する。

それは実存主義が、純粹主観 (Pure Subjectivity)、すなわちデカルトの我思う (Cogito) から出発しているからだという。

だが実存主義も真面目に探究し、対決するに値する一つの思想であると思ふのでこゝに取上げることとしたわけである。

若し果して実存主義が上述の非難のように、単に個人の主体性のみを強調して社会連帯性を無視したり、醜悪なるもののみを描いて人生の美を忘れたり、人々を絶望的静寂主義へと誘つて一種の静観主義クワイエチスムに安住するものであつたり、乃至は悲観主義ペッシミスム、虚無主義アナキスムに沈潜してしまつたり、人間の自由のみを説いて、責任を廻避する主張であるならば、これを問題にすること自身がすでにナンセンスであることは何人にとつても明かなことである。

既にサルトルは雑誌「現代」において述べているという。

「現代人の意識は二律背反によつて分裂している。一方はひたすら個人の権利、個人の自由のみに固執する分析精神であり、それは個人をその現実的な生存条件のそとに抽象し、人間をグリーン・ピースの一粒

一粒のようなものと考ええる。

他方は、個人を無視して、もつぱら集団のみをみる綜合精神であり、それは人間を十把ひとからげに取扱かい、個人を階級に、国家を一つの全体に従属させ、かくしてその全体観を絶対化する思想である。

現代の不安は、われわれがこの両極端の中間に懸けられておりながら、そのいずれをも、われわれが承認し得ないところに由来する。

人間は自分の属する時代と環境によつて全面的に条件づけられてゐるにもかゝらず、他の何ものにも還元し得ない無限の可能性をばらむ一つの中心点である。時代は個人のなかに、個人によつて、表現されると共に、個人は自分のなかに、自分の時代によつて、自己の立場を選ぶ。社会が人間を作るとすれば、逆に人間はまた社会を作る。このような緊張の地点にわれわれは実存実存している」と。

サルトルが個人主義的傾向の強いキュルケゴールやニーチェの実存主義的伝統を受継ぎながら彼のヤスバースの相互交通性 (Kommunikation) と相並んで相互主体性 (Inter-Subjectivity) 或は状況 (Situation) のような社会性を取上げていることは右の一文でも明瞭であらう。

「実存主義とヒューマニズム」はむしろ上述の非難に対する一々の解答と、それを通して積極的に彼の実存主義の主張を公開しようとした講演である。

「先ず最初からいゝ得ることは、われわれが意味する実存主義とは、

人間生活を方能にする教えであり、また一面あらゆる真理、あらゆる行動は、人間的環境と人間的主体性を内にふくむと宣言する教えだということである」

「スキヤンダルや風変わりな運動に飢えている人たちはこの哲学に助を求められないが、しかしこの実存哲学はその方面では彼等に何物も与えはしない。実のところ、これは最も反スキヤンダルの最も厳肅な主義である」

ただ事を複雑にしているのは、実存主義に二つの流れがあるからだ。

第一はキリスト教信者であるヤスパースやマルセルがこれに属し、第二は無神論実存主義者で、ハイデッガーがこれに属し、サルトル自身もこれに属している。

この両者に共通なことは『実存は本質に先立つ』と考えていることである。或はこれを『主体性から出發せねばならぬ』といふかえてもよからう。

本稿の最初頃に述べた言葉との関連においてこれを述べると、

「現実存在が本質存在に先立つ」という考え方である。これはもつと正確にはどのようなことであるのか。

かりにナイフというある一つの物体を考えて見よう。この場合この物体はどこかの職人が作ったものである。職人はこれを作る時、ナイフというもの、アイデアを持つていて、一定の製造法に従つてこれを作つたのだ。

このアイデアがナイフの本質である。

このように物を作る時には本質があらかじめあつて、しかる後に現

実の存在が作られるのである。

「本質が実存に先立つ」とはこの意味である。

神が天地の創造者であると考える考え方もこれと同様である。

この世の事物とか、人間の実存とかに先立つて、人間の本質が既にあらかじめ神の持つて居るアイデアの中に存在していることとなる。

個々の現実的な人間存在に先立つて人間性一般が前提されている。人間性といつたような普遍的なものがまず先にあつて、しかる後に個々の人間がその実例として存在するという考えである。

ところがサルトルの実存主義では考え方が逆である。

「たとえ神が存在しなくても、実存が本質に先立つところの存在、何等かの概念によつて定義されうる以前に実存している所在がすくなくとも一つある。その存在はすなわち人間である。」

では実存が本質に先立つとは、この場合なにを意味するのか。

それは、人間はまず先に実存する。いふかえれば人間はまず世界の中に現われ出る。そしてその後に定義されるものであるということである。

実存主義者が考える人間が定義不可能であるのは、「人間は最初は何者でもないからである。」(It is because to begin with he is nothing) 人間は後になつて始めて人間になるのであり、人間はみずからが作ったところのものになるのである。

人間の本性は存在しない。その本性を考える神が存在しないからである。人間は彼がなるであろうところのものになるにすぎない。

「人間はみずからがつつたところのもの以外の何物でもない」

Man is nothing else but that which he makes of himself.

即ち人間においては、「実存が本質に先立つ」のである。これが実存主義の第一の原理であり、これがまた実存主義のいう主体性 (Subjectivity) である。そしてこれがまた人間の尊厳であるという理由でもある。

人間は花キャベツではなく、まず第一に主体的にみずから生きる ^{クワダ} 企 なのである。人間は未来に向つて物事を企てる (project) ものであり、またそれをみずから意識してゐる存在である。

人間がかく一つの企であり、主体的存在であるということは、人間が自分の現にあるところのものについて責任をもつということである。

従つて実存主義の第一歩は「各人をして自らあるところのものを把握せしめ、みずからの存在について責任を彼に負しめることである、そして、人間はみずからについて責任を持つという場合、それは厳密な意味で彼個人について責任をもつということではなく、全人類に対して責任をもつという意味である。

「主体性」ということには二つの意味がある。第一の意味は、「個々の主体がみずから自身を選択する」ということであり、第二の意味は「人間は人間としての主体性を越え得ない」ということである。

この第二の方がむしろ実存主義者にとつては意味深いとサルトルは *Sartre*。

既に述べたように人間が主体的であるということは、

(1) 人間は自らの在り方を自ら計画し企てる存在であり、自ら選ぶとる存在であるということ、共に

(2) 人間は彼の選択した自己の在り方に責任をもつ存在であり、しかもその責任は単なる自己に対する責任のみでなく、全人類に對する責任であつた。

サルトルにとつてはこの際の責任はあくまで人間的主体性としてのそれである。全しく「個人は個人自身であると共に人類である」と語つてゐるキェルケゴールが、一人一人が人類を代表するものとして罪を負うて神の前に立つたのとは異なり、「人間は人間であり、人間の外には脱し得ず、人間は人間としての主体性を越え得ないという人間的連帯性」を主張してゐるのである。サルトルの実存主義から帰結されるヒューマニズムはかかる人間的主体性にその源泉をもつてゐるのである。

サルトルはこの主体性の原理を例を以つて述べてゐる。

「若し私が結婚し、子供をつくることを望んだとしたら、たとえこの結婚がもつぱら私の境遇なり情熱なり欲望なりに基づくものであつたにしても、私はそれによつて、私自身だけでなく、人類全体を一夫一婦制の方向へ拘束することになる」と。

こうして人間は、自分自身に對し、そして人類全体に對して責任を負い彼の選ぶ或る人間像を創りあげるのである。

私は私を選ぶことによつて ^{ヒューマニティ} 人類を選ぶのである。

実存主義はヒューマニズムであるといふのはまさにこのような意味

においてである。

さて実存の根本原理は「実存は本質に先立つ」ことであり、それは又「人間の主体性」であることが明かになつたのであるが、かゝる実存は具体的にはどんな在り方をしてるのであろうか。

これに答えることが実在の意味を一層明瞭に開示することであらう。

実存主義者はよく実存は「不安」だ「孤独」だ「絶望」だという。

なぜそうなのか。なに故に人間は不安なのであるか、サルトルによればそれは「人間は単に自己がかくあろうとして選ぶ者であるばかりでなく、さらに自己と同時に人間全体を選ぶのだ」という、大きい責任を感じ、からである。

なるほど多くの人々は常に不安を感じてはいない。しかしそれは人々が自己の不安に眼を覆つて、この不安を逃避しているからだ。

不安は、たとえ仮面をかぶろうとも姿を現す。

責任を感じたことのある人ならみんなが知つている単純な不安である。特に指導者、役員になつて重責を負つた場合には一層顕著に感ずるあの不安である。

「果して私にこの重責が果せるか疑問であります……」という挨拶はこのことを如実に物語つているといえよう。

教育実習生として或は教師として最初に教壇に立つ場合など誰しも感ずるあの不安である。

実存は不安を覚える。

学校の方針は校長から来るに違いないが、この方針は幅が広く、従つて具体的にはぜひとも或る一つの解釈が必要となる。

この解釈、この選択、この自由は担任教師自身から出て来るのであり、四十人、五十人の生徒の生命がこの解釈によつて左右されるのである。

彼は決定にあたつて或る種の不安を抱かすにはいられない。

しかしこの不安があるからといつて、これが担任教師の行動を妨げはしない。それどころか、そのことがむしろ彼の行動の条件になつているのである。教壇に立つ道はもともと彼の選んだ道であり、今の解釈は自分で選んだものであり、自分で主体的に選んだものは価値があるということ彼は理解しているからである。

不安はわれわれを行動から距てるカーテンではなくて、まさに行動の一部なのである。

「……ベストを尽して職責を全ういたします」という行動の条件なのである。

孤独、—ハイデッガーが好んで用いる言葉であるが—とはサルトルではどのように考えられているのか。

孤独は不安に伴う。

人間は自己を選ぶと共に全人類を選ばねばならない。ここに人間の不安があり、責任ある行動の根源があつた。しかもこの選択、この自由は、人間が自分自身で引受けなければならぬ。

最後の決断を下すものは自分ひとりである。こゝに実存の孤独があ

る。無神論的実存主義者にとつては、外にたよるべき神も存在しないし、内に経験に先立つて与えられているような道徳的至上命令もなく、また唯物論的決定もないのである。

人間はどこにも逃口上を窺見する場所がない。人間は自由である。人間は自由そのものである。

Man is free, Man is freedom.

否、人間は自由であるべく、負課されているのである。刑に処せられて、いるのである。もつと強くいえば呪わ、れているのである。

人々は自由を、獲得さるべき何物か、到達さるべき何物かのように思いなして、融通無礙の絶対境に憧れるようないゝ方をする。が実は、人間はいつでも自由であるよりほかの在り方を持たないのである。

人間はひとたび世界のなかになげだされたからには、自分のなすこと一切について責任があるからである。

実存主義者はまた情熱の力も信じない。何となれば、情熱も彼が選びとつたものとして彼の責任に属するからである。

実存主義者はまた、人間が地上で、自分の行くべき道を教えてくれるような或る与えられた標識サインの中に助を見出し得ると考えていない。この標識も自ら読解しなければならぬものだと考えるからである。

このように考えてくると、人間は何の抛り処もなく何の助けもなく刻々に自分を造り出すべく見捨てられているのだ、孤独だと考えざるを得ない。ある人が「人間は人間の未来である」Man is the future of man. としつつがまさにその通りである。

勿論この意味は、人間は創造さるべき未来を持つていてという意味で正しいので、この未来が神意に刻みこまれていてという意味ではない。このように人間は見捨てられた孤独の中に生きてるのである。かくて

「孤独とは人間が自分自身で人間の存在を選ぶということを内にふくんでいる。」「孤独は不安に相伴う。」

これがサルトルの孤独に関する結論である。

次に絶望とは何であるか

この説明もかんたんであるとサルトルは言う。これは今まで述べて来た不安や孤独を更に行動の面に推し進めて考えたものである。

即ち絶望とは、「われわれが、われわれの意志によつて左右し得るようなものだけしか当てにならないということである。

いゝかえれば、われわれの行動を可能ならしめる蓋然性の総体しか当にならないということである」

人間は実行不可能なことに希望がかけられないとするとところに実存主義者の絶望がある。

もつと言えば人間の死後他の人々がどうするかということは、明日の自由な判断に委ねられているということである。

では、実存主義は無為主義乃至静寂主義に身をまかせるのであるか
そうではない。まさに全く反対である。

無為主義とは「私がやれないことを他人にやらせよう」という人の態度である。

実存主義者は、彼の「行動のなか以外に現実はない」と明言するものである。更に進んで言えば「人間は彼自身の企以外の何者でもない。人間は自己を実現する限りにおいてのみ存在する。従つて彼の行動以外の彼の生活、以外の何ものも存在しないのだ」と明言する。

「私は大した本も書かなかつた。そうする暇が私にはなかつたからだ」という人があるが、実存主義者はそう思わない。

芸術作品のなかに表現される天才以外には天才はないのである。

全様に形成されつゝある恋愛のほかには恋愛はないのである。もつと的確に言えば、人間は企の連続以外の何ものでもないものであり、人間はこれらの企を構成する様々な関係の総和なのである。

実存主義はまた悲観論でもない。

実存主義者がよく文学作品のなかで、無気力な人間、弱い人間、悪辣な人間を描くことを非難する人がある。

これに対するサルトルの答はこうだ。

例えば、悪辣な人間になつた原因として、それは遺伝がそうさせるのだ。境遇の為だ、社会の罪だ、生理的・心理的欠陥だと明言したとすると人は安心して「なるほど人間はそういうものだ、誰だつてこれをどうにもならないのだ」というだろう。

しかし実存主義者は「悪辣な人間」を描くとき、「この悪漢は彼の悪辣さに対して責任がある」というのである。

今人間は悪辣であつても、明日彼はそこから足を洗う可能性があるかと考える。

この可能性は人間の自由、人間の選択、人間の決断、さらには人間の行動によつていつでも実現出来るかと考える。

実存主義は悲観論であるどころか、実は厳しい楽観主義である。

「事を企てるに希望はいらぬ」「しかし「希望は彼の行動のうちにある」ことを主張したのである。

以上によつてサルトルの実存主義の基本的構造、ならびに実存の具體的な在り方が如何なるものであるかがほぼ明かになつたと思う。

実存主義は主体性から出発する。そして実存は責任を以て自己を選ぶと共に、それを通じて全人類を選び、その責任を自らに負うものでありしかもそれは行動と連帯性のヒューマニズムでもあつた。

不安も、孤独も、絶望もかゝるヒューマニズムに縁由するが故であつた。

ではかゝる実存主義は何に確実な根拠を置いているのであるか。

サルトルは次の三つの確実なものを認めている。

第一、人々は実存主義は、人間を単なる個人的な主観のなかに閉じこめるものと非難する。しかしそれは誤解である。

なるほどわれわれの出発点は個人の主体性であるが、これは厳密な哲学的理由によるものである。

実存主義は出発点としてはデカルトの「我思う、故に我在り」という真理を最も確実な真理だと考える。

これこそ自分自身を捉える意識の絶対的真理であるかと考える。

何となれば実存主義を主張するかには、実存の確実性から出発してはならぬ。しかるに確実性は疑い得ぬものに求めねばならない。われわれが疑いに疑つて最後に疑い得ないものは疑う自我そのものである。デカルト的自我はそのようなものであるからである。

第二、実存主義は、「人間に尊厳を与える唯一のもの、人間を単なる物体視しない唯一の学説である。

唯物論は自己を含めてあらゆる人間を物体として取扱う。しかし実存主義は人間界を物質界と区別された諸価値の全体として構成しようとする。

しかしわれわれがこゝに真理として到達する主体性は、厳密に個人的な主体性ではない。われわれは「我思う」Cogitoのなかに自分自身だけでなく他者を発見する。デカルトの哲学、カントの哲学とは反対に、コギトによつて、他者の面前でわれわれ自身をとらえる。そして他者はわれわれにとつて、われわれ自身と全様に確実なものである。コギトによつておのれをとらえる人間は、すべての他者を発見する。しかも他者を自分の存在条件として発見するのである。

人間は他人がそう認めない限り自分が何者でもあり得ないことを理解している。私に關してある事実を握るためには、私は他者を通じて来なければならぬ。他者は自我認識のみでなく、私の存在に不可欠なのである。

私の内奥の発見は全時に他者の発見である。」

かく考えてサルトルは Inter-Subjectivity 「相互主体性」或は「間—主体性」と呼ぶ一つの世界を発見したのである。

人間はこの相互主体性において、即ち主体性と主体性との間において、現に自分があるところのものと、他者があるところのものを決定することができるのである。

第三、上述のようにサルトルは先ず、デカルト的自我の実存を認め、次にそれを通じて他者の実存を認めたが、第三に彼は条件 (Condition) 或は状況 (Situation) という考を持ち出すことによつて実存主義を一層深めてゐる。

われわれは既にハイデッガーによつて、人間が「世界内存在」(In-der-Welt-Sein) として捉えられるべきであることを示唆されて来てゐる。

即ち人間はカントが考えたように、具体的な社会や環境から独立に生き得るかに考へるべきでなく、人間は自らがそのうちに規定されつゝ生きてゐる、また生きざるを得ない一定の世界に投げ入れられてゐる存在であるというのがハイデッガーの実存的思考であつた。

が状況 (Situation) から出発して哲学すると自ら名乗つたヤスパーはハイデッガーの思想を更に進めて人間を状況内存在 (In-der-Situation Sein) として捉えた。

この思想はハイデッガーの世界内存在より一層具体的意味を含んでゐるといわれる。

状況というのは極めて包括的な概念であつて、人間が現存してゐる生存の地盤として一切のもの、即ち、自然的、社会的、技術的、経済的、政治的、文化的、思想的な情勢の一切の構造連関を指すものである。

それは、分離したり結合したりして人間を幾重にも取りまいている現実である。

そして状況は主体に対して単に客体の総体として対立しているものではなく、意味をもつ関連として主体に深く関係し、物理的であると全時に心理的な現実であり、利益又は損失、機会又は桎梏となるものである。

所与であると共に可能性を意味するものである。

この無常の状況内に生きる人間の認識も行動も寧ろ難破し挫折し続ける外ないと感ずるものであるが、しかし人間はかゝる作られた存在与えられた存在に満足することなく、状況の只中に生の新しい意味を探索し遂に飛躍的に眞の自己存在の尊厳に目覚め、作るものへの立場に転換する。

即ち人間は状況―内―存在を逃避することは不可能であるが、しかも自己自身のもつ絶対的自由の決断と選択によつて一定の状況の中へ進んで参入し、そこにおいて技術的或は政治的行動によつて自己の欲する状態へと状況そのものを変化し得る力を自覚するに至るのである。

「他者としての世界は決して与えられてあるのではない。世界が私に対して如何ように与えられていようと、それは私の能動態を通じてはじめて近づき得るものとなる」これがヤスパースの状況概念である。

サルトルの状況概念が、ハイデッガーやヤスパースの哲学に源泉を求めていることも推察できるのであるが、実際にサルトルの条件乃至

状況とは何であるか。

「人間の本性という普遍的本質を個々の人間に発見することは不可能であつても、条件、という人間の普遍性は存在する」

サルトルは前に述べたように第一に自我を第二に他我を認めたのであるが第三に進んで自我と他我の存立の地盤として条件或は状況という概念を提示し、これに彼らしく普遍性を与えようとしているのである。条件或は状況（以下状況という）は

(1) 主体的な面と客体的な面とを持つている。客体的というのは人間がいたるところでこの限界にぶつかるからである。

主体的というのは人間がその限界を自分のものとして生きられるものであるからだ。

前に人間は企であるといつたが、この企というのは、そういう限界を乗り越え、抜け、否定し、適合するための試みなのである。

人間の企は種々であろうが、その何れの一つも私にとつて無関係のものではない。

この意味で状況は主体的・客体的、或は客体的・主体的なものである。

(2) しかもかゝる状況は時代により個人によつて異なるものであつても、普遍的価値をもつている。

印度人の企や目的もヨーロッパ人に理解されるのである。

「あらゆる企はあらゆる人間にとつて理解し得るものであるとの意味において一切の企での普遍性が存在するのである。」

(3) そしてその状況の普遍性は与えられたものでなくして、不断に

作られつゝあるものである。

「私は自分を選ぶことによつて普遍を作り、相手がいかなる時代に属そうとも、あらゆる他人の企を理解することによつて普遍を作るのである。」

こゝに人間は自己を選ぶことによつて人間を選ぶという連帯性成立の実存主義的基盤があることを見出すのである。

実存主義のねらいは、自らを選択しなければならぬという自由の絶対的性情と、この選択の結果として生じ得た文化の相対性との関連なのであつた。結合なのであつた。

実存は単に普遍的状况においてあるのではなく最も限定された個別的狀況において、同時に普遍的状况のうちにあるのであり、両者は常に相関的なのである。

狀況においては絶対的なものと普遍的なものが一つなのである。

この意味でわれわれ一人一人の人間は、呼吸し、食ひ、眠り、或る仕方で行動することによつて絶対的的行為を行いつゝあるのである。

実存しているのである。

狀況のうちにおいて人間の尊厳と人間の普遍性とを説くところに実存主義のヒューマニズムがあるのである。

サルトルが実存主義はヒューマニズムであるという場合の哲学的根拠は、以上によつて一応開明されたと思うが、最後に私は彼がヒューマニズムそのものに関して直接彼の所信を明にしている箇所を探究し

て私の叙述を終らうと思う。人々はサルトルが実存主義はヒューマニズムか否かを云々するのは誤りだと非難する。

「君は「嘔吐」の中でヒューマニストは間違つていいると書き（本稿最初の会話参照）或る型のヒューマニズムを愚弄した、なぜ今になつて君は問題をむしかえすのか」と。

これに対するサルトルの答は次のようである。

「ヒューマニズムは普通と違つた二つの意味をもつていいる。」

ある人たちはヒューマニズムという言葉によつて、人間を究局目的と考え、人間に最高の価値を置く理論であると理解していいる。しかし実存主義は決して人間を究局目的とは考えない。

実存主義は価値創造の立場に立つて人間の尊厳を説くヒューマニズムである。

人間は常に作られつゝあるものであり、未完成なものである。何か人間性ヒューマニテイというようなものがあつて、たとえばコントがやつたように、そのヒューマニテイを礼拝することが出来ると思へるのは迷夢である。

ヒューマニテイの礼拝は、ひつきよう閉ざされたヒューマニズムに終り、ファツシズムに終る。（先に独学者が人達皆を愛なければならぬといつた時のロカンタンの鋭い批判が出たのもここからである）これは古いヒューマニズムである。実存主義者のいうヒューマニズムはこれとは違ふ。人間には二つの面がある。

人間が実存するのは一方絶えず自己を企て、自分自身を失うことによつてである。

いゝかえれば、超越的目的を追求することによつてである。人間はかゝる意味での自己超越なのである。しかし超越といつても人間の存在を越える神にまで高まるという意味でなく、人間が不断に自己を自己の外に投げかける、即ち企てる場合の超越である。無神論的実存主義者にとつては、人間の世界の外に、すなわち人間の主体性の世界の外に世界はないのであるから、

又他方人間が実存するのは、右のように人間の世界に向つて自己を越えて行くことにおいて、すべてのものをその超越への関わりにおいて捉えると共に、人間はその超越において超越の中心に立つものである。

(He is himself the heart and centre of his transcendence)

要するにかゝる人間形成としての超越と主体性との二つのものゝ結合こそ、サルトルが実存主義的ヒューマニズムと呼ぶものなのである。

ヒューマニズムであるというわけは、一方われわれが人間に対して人間以外の立法者はないということ、人間は孤独のうちにおいて、他に依存することなく、自分自身を決定しなければならないということ、を想起させるからであり、他方人間が真に人間として自己を實現出来るのは、自己自身の方を顧ることによつてでなく、自己の外に一種の解放、或る特殊な實現という一つ目的を不断に追求すること、簡単に超越的な目標を追求することによつてであるからである。これがサルトルのヒューマニズムの結論である。

三、むすび

以上によつてサルトルの実存主義から「ヒューマニズム」を探究したのであるが、「要するに彼は実存は本質に先行するという命題、即ち主体性から出発してヒューマニズムの理論を展開した。

実存は主体的である。実存は責任を以つて日々の生活を主体的に生きている存在である。

主体的に生きるということは実存が人間界の限界内で、自己の行為を自己で選び、自己で決定しながら生きることである。

人間は自己を選ぶと共に人類を選ぶ存在である。こゝに実存の不安と孤独と絶望がある。しかしこの不安と孤独と絶望は自由なる個人が具体的な社会への連体的責任を感じるが故にのそれらである。

実存主義がヒューマニズムであるというのはこの意味においてである。

このヒューマニズムの思想的根拠は何であつたか

- 1 Cogito (自我意識) — 自己人格の確実性
- 2 Inter-Subjectivity (相互主体性) — 他者の人格の尊厳性
- 3 Condition (条件) — 自・他をあらしめている状況

であつた。実存は自己の人格と共に他者の人格の尊厳性を認めつゝ普遍的な状況の中に生きている。

状況は主体的であると共に客体的である。人間に対して作られたものであると共に人間が作つて行くものである。

実存は常に自ら未来に向つて企てながら自己超越的に生きている。

人間の絶対的自由とこの自己超越との二つのものゝ結合が実存主義的ヒューマニズムである。

人間は人間の自由において自分自身を実現しなければならないと共に、この自己実現は他者を通してであると確認し行動するところにヒューマニズムがある。」

私にはヒューマニズムに関する探究にはいまだ数々のものが残されている。同じ実存主義的思考の中でも、ヤスバースは「新たなヒューマニズムの条件と可能について」語っている。

日本の教育学者の中でも新しくヒューマニズムの系譜を探究され出した方もある。

しかし今回はこれで止めざるを得ない。

とはいえ、これだけの私の企にあたつても、今は故き先輩、現にこの方面の研究で立派な企をしていられる多くの方々の教を受けたことを感謝せずにはいられない。

それは次のようなものであつた。

「実存と愛と実践」田辺元著 「ヒューマニズムの倫理思想」三木清著

「キユルケゴールからサルトルへ」高坂正顕著 「実存の倫理」鈴木三郎著

「教育研究第二号」。「実存哲学」松浪信三郎著

「実存主義的人間」ジャン・ヴァール著

「Philosophie」一部訳「世界」上・下、武藤光朗訳「哲学と科学」ヤスバース著

ース著

「サルトル全集」人文書院、英訳「Existentialism and Humanism」

一九五五、一二、一三一